

天平びとの声をきく―地下の正倉院・平城宮木簡のすべて

解説シート 付録

展示期間

Ⅰ 二〇一〇年 九月二十五日(土)―一〇月二日(月)

Ⅱ 一〇月三日(水)―一〇月五日(月)

Ⅲ 一〇月七日(水)―一〇月九日(木)

【木簡が見つかった遺構】

(遺構番号順。年は展示木簡の出土年で、その遺構の全ての調査年を示すものではない)

SK二一九 (3)

重要文化財 一九六一年

平城宮中央区の第一次大極殿院の跡地に建てられた西宮の北側に展開する役所のゴミ捨て穴。平城宮跡最初の木簡出土地として名高い。天平宝字末年頃(七六〇年代前半)の遺物を中心とする。この遺構出土の木簡群は、同じ役所内の井戸SE三一―出土の木簡とともに、平城宮跡大膳職推定地出土木簡として、二〇〇三年に木簡では初めて重要文化財に指定された。

SK八二〇 (第二室 45678、第三室 1223、第四室 172178196198199)

重要文化財 一九六三年

内裏の北東に位置する北外郭官衙西辺に掘られたゴミ捨て穴。七四五五年の平城遷都後のこの地域の再整備に関わるゴミを投棄した土坑で、七四七年(天平十九)頃に埋められたとみられる。平城宮跡で最初に千点規模の木簡群が見つかった遺構。平城宮跡内裏北外郭出土木簡として、二〇〇七年に重要文化財に指定されている。

SK二一〇一 (第四室 176)

重要文化財 一九六四年

内裏の真北に位置する役所のうち、東半の広場部分で見つかった密集するゴミ穴の一つ。周辺にはいくつものゴミ穴が重複して掘られ、井戸の南西側の作業場兼塵芥処理場のような様相を呈していた。そのいくつかから木簡が出土した。SK二一〇一は、東西三・五m、南北三・四mの方形を呈する。SK八七〇・SK二二〇二・SK二二〇七木簡とともに、平城宮跡内膳司推定地出土木簡として、二〇一〇年に重要文化財に指定された。

SK二二〇二 (第四室 207208)

重要文化財 一九六四年

内裏の真北に位置する内膳司と推定される官衙のうち、東半の広場部分で見つかったゴミ密集地域のゴミ穴の一つ。SK二二〇一のすぐ北に位置する、東西三・八m、南北二・四m、深さ〇・三mの浅い穴である。SK八七〇・SK二二〇一・SK二二〇七木簡とともに、平城宮跡内膳司推定地出土木簡として、二〇一〇年に重要文化財に指定されている。

SD一七〇〇 (第二室 88、第三室 167)

一九六五年

平城京の北東に位置する水上池の南西部に端を発し、内裏東辺を南流してその排水を集める基幹排水路。内裏東辺では石の護岸をもつが、それより南では一部に木杭による護岸がみられる程度となる。東区朝堂院・朝集殿院東辺の東方官衙のどこかの地点で東に折れ、SD三三二―に接続していたとみられるが、その地点は未詳。内裏周辺では、天平期以降の多量の遺物が層位的に堆積していることが知られている。

SD三三二 (第二室 1819202122、第四室 174178183184185)

一九六五年

造酒司の井戸の排水を流すために役所の西辺に位置をずらしながら何度か掘られた南北溝の一つ。南端は造酒司南限の築地塙を暗渠で抜けて宮内道路の側溝に接続する、敷地内では奈良時代を通じて淀み状に広がり、ゴミも投棄されて湿地状を呈していたとみられる。

SD三三二 (第二室 89、第四室 186)

一九六五年

東院西辺北部を北東から南西に斜行して流れる素掘りの溝。幅一・四m、深さは約〇・四m。西端で素掘りの南北溝SD三二五―に接続し南流する。

S A三六二 (第二室 87)

一九六五年

東院西辺の斜行溝 S D三一五四の西に位置する東西棟建物 S B三三二一の北を面する東西塀で、一〇間検出した。木簡は楡皮が充満した柱掘方から出土した。

S D三三四一〇 (第一室 2, 第三室 141)

一九六五・六六年

S D三三四一〇は、平城宮跡東院と東方官衙の間の宮内南北道路の西側溝。小子門以南は東面大垣内側(西側)に沿って流れる。141が出土したのは、東院西辺を流れる平城宮跡内の地点であり、上流の内裏方面から流れてきたが、東院に関係する可能性が考えられる。

S D三三四一〇は、宮東南隅で西から東西溝 S D四一〇〇を合わせたあと、南面大垣を暗渠で抜け、二条大路北側溝 S D二一五〇に合流する。2が出土したのはこの付近である。二条大路北側溝 S D二一五〇は、S D三三四一〇を合わせたあとさらに東流し、東面大垣東側の東一坊大路西側溝 S D四九五に注ぎ込む。複数の溝が錯綜して流れるこの付近は、平城宮東部の排水が集まる地域であり、上流部から流れ下ってきたものも含まれる。したがって有数の木簡出土地になっている。

S D四一〇〇 (第二室 33 34 35 36 91 92 93 94 95 96 97, 第三室 143, 第四室 200 201 202 203 204 205)

一九六六年

平城宮東南隅の南面大垣内側を東に流れる東西溝。東面大垣内側の南北溝 S D三三四一〇に合流する。木簡は、式部省の勤務評定に関わる削屑が大半を占め、養老・神龜年間(七一一七・七二九)から宝龜元年(七七〇)のものまでを含むが、養老・神龜年間のものは南面大垣を横断する南北溝 S D一六四〇と一連の遺物とみられ、S D四一〇〇の木簡は基本的に宝龜元年頃に一括して投棄されたものとみられる。なお、宝龜年間頃に北側に移転してきたとみられる神祇官に関わる木簡も、僅かではあるが含まれている。

S D四七五〇 (第一室 1, 第二室 45 46 47 48 49 50 51 52, 第三室 138 139 140 141 142 143 144 145 146 147 148 149 150 151 152 153 154 155 156 157 158 159 160 161 162 163 164 165 166 167 168 169 170 171 172 173 174 175 176 177 178 179 180 181 182 183 184 185 186 187 188 189 190 191 192 193 194 195 196 197 198 199 200 201 202 203 204 205 206 207 208 209 210 211 212 213 214 215 216 217 218 219 220 221 222 223 224 225 226 227 228 229 230 231 232 233 234 235 236 237 238 239 240 241 242 243 244 245 246 247 248 249 250 251 252 253 254 255 256 257 258 259 260 261 262 263 264 265 266 267 268 269 270 271 272 273 274 275 276 277 278 279 280 281 282 283 284 285 286 287 288 289 290 291 292 293 294 295 296 297 298 299 300 301 302 303 304 305 306 307 308 309 310 311 312 313 314 315 316 317 318 319 320 321 322 323 324 325 326 327 328 329 330 331 332 333 334 335 336 337 338 339 340 341 342 343 344 345 346 347 348 349 350 351 352 353 354 355 356 357 358 359 360 361 362 363 364 365 366 367 368 369 370 371 372 373 374 375 376 377 378 379 380 381 382 383 384 385 386 387 388 389 390 391 392 393 394 395 396 397 398 399 400 401 402 403 404 405 406 407 408 409 410 411 412 413 414 415 416 417 418 419 420 421 422 423 424 425 426 427 428 429 430 431 432 433 434 435 436 437 438 439 440 441 442 443 444 445 446 447 448 449 450 451 452 453 454 455 456 457 458 459 460 461 462 463 464 465 466 467 468 469 470 471 472 473 474 475 476 477 478 479 480 481 482 483 484 485 486 487 488 489 490 491 492 493 494 495 496 497 498 499 500 501 502 503 504 505 506 507 508 509 510 511 512 513 514 515 516 517 518 519 520 521 522 523 524 525 526 527 528 529 530 531 532 533 534 535 536 537 538 539 540 541 542 543 544 545 546 547 548 549 550 551 552 553 554 555 556 557 558 559 560 561 562 563 564 565 566 567 568 569 570 571 572 573 574 575 576 577 578 579 580 581 582 583 584 585 586 587 588 589 590 591 592 593 594 595 596 597 598 599 600 601 602 603 604 605 606 607 608 609 610 611 612 613 614 615 616 617 618 619 620 621 622 623 624 625 626 627 628 629 630 631 632 633 634 635 636 637 638 639 640 641 642 643 644 645 646 647 648 649 650 651 652 653 654 655 656 657 658 659 660 661 662 663 664 665 666 667 668 669 670 671 672 673 674 675 676 677 678 679 680 681 682 683 684 685 686 687 688 689 690 691 692 693 694 695 696 697 698 699 700 701 702 703 704 705 706 707 708 709 710 711 712 713 714 715 716 717 718 719 720 721 722 723 724 725 726 727 728 729 730 731 732 733 734 735 736 737 738 739 740 741 742 743 744 745 746 747 748 749 750 751 752 753 754 755 756 757 758 759 760 761 762 763 764 765 766 767 768 769 770 771 772 773 774 775 776 777 778 779 780 781 782 783 784 785 786 787 788 789 790 791 792 793 794 795 796 797 798 799 800 801 802 803 804 805 806 807 808 809 810 811 812 813 814 815 816 817 818 819 820 821 822 823 824 825 826 827 828 829 830 831 832 833 834 835 836 837 838 839 840 841 842 843 844 845 846 847 848 849 850 851 852 853 854 855 856 857 858 859 860 861 862 863 864 865 866 867 868 869 870 871 872 873 874 875 876 877 878 879 880 881 882 883 884 885 886 887 888 889 890 891 892 893 894 895 896 897 898 899 900 901 902 903 904 905 906 907 908 909 910 911 912 913 914 915 916 917 918 919 920 921 922 923 924 925 926 927 928 929 930 931 932 933 934 935 936 937 938 939 940 941 942 943 944 945 946 947 948 949 950 951 952 953 954 955 956 957 958 959 960 961 962 963 964 965 966 967 968 969 970 971 972 973 974 975 976 977 978 979 980 981 982 983 984 985 986 987 988 989 990 991 992 993 994 995 996 997 998 999 1000)

長屋王家木簡 一九八八・八九年

平城京左京三条二坊一・二・七・八坪で見つかった左大臣長屋王の邸宅のうち、八坪東南隅に東面築地塀の内側に沿って掘られた南北溝状のゴミ捨て土坑。総延長は約二・七・三 m。平城遷都からまもない時期の、貴族の

家政機関の資料という他に類例のない木簡が出土した。長屋王が式部卿を務めていた七二六年(靈龜二)後半の、邸内における米支給の伝票木簡を主体とする。

S D四九五一 (第二室 90, 第三室 120 131, 第四室 212)

一九六七

東院西辺の排水を集める溝で、小子門の西側から宮外へ出て、東一坊大路の西側溝となる。二条大路北側で西から流れてくる二条大路北側溝 S D二一五〇を合わせ、さらに京内を南流する。京内の道路側溝としては最も多くの木簡が出土しており、宮近辺だけでなく、七条でも千点規模の木簡の出土が知られる。

90は、小子門の脇を通過して宮外へ流れ出た、平城宮東面の東一坊大路西側溝部分から出土した。120は、小子門北西の宮内部分から出土した。212は、二条大路北側溝 S D二一五〇と合流して二条大路を横断し、南側溝 S D四〇〇六と合流する付近から出土した。

S D五一〇〇 (第三室 121 132 166, 第四室 175 179 181 182 188 189 193 194 195 209)

二条大路木簡 一九八八・八九年

平城京左京三条二坊八坪(光明皇后宮。旧長屋王邸)と二条二坊五坪(藤原麻呂邸)の間の二条大路上の南北両端に掘られた溝状の遺構のうち、皇后宮の北門から八坪北辺築地塀に沿って二条大路南端に掘られた遺構。総延長約一・二〇 m。

S D五三〇〇 (第二室 69 70 71 72 73 74, 第三室 142 144 145 146 148, 第四室 190 191 192 206 210 211)

二条大路木簡 一九八九

平城京左京三条二坊八坪(光明皇后宮。旧長屋王邸)と二条二坊五坪(藤原麻呂邸)の間の二条大路上の南北両端に掘られた溝状の遺構のうち、藤原麻呂邸南門前から東に二条大路北端に沿って延びる遺構。総延長約五・八 m。西端の門前から、藤原麻呂邸の家政機関に関わる木簡が集中して見つかった。

S K五一〇四 (第四室 213)

一九六七

東張り出し部の付け根部分に南面して建つ小子門の南西、東一坊大路西側溝 S D四九五一のすぐ東の路面上にあたる場所で見つかった南北に長い楕円形のゴミ穴。長径二・八 m、短径二・三 m、深さは〇・七 m である。